

三 真言宗の統一をめざす

—弘法大師の精神を貫いた覚鑿上人—

佐賀県西部の町、鹿島市の町はずれに誕生院というお寺があります。この地は、真言宗のお坊さんである覚鑿上人の生まれた所です。覚鑿上人とはどういふ人なのでしょう。まずは平安時代の仏教の動きに目を向けてみましょう。

九世紀のはじめ、唐から帰国した最澄（伝教大師）と空海（弘法大師）は、仏教の新しい宗派を伝えました。最澄は比叡山（滋賀県・京都府）に延暦寺を建てて天台宗を広め、空海は高野山（和歌山県）に金剛峰寺を建てて真言宗を広めました。いずれも奈良時代の仏教とはちがって、人里はなれた山奥の寺で学問や厳しい修行を



誕生院（鹿島市行成）

行い、日本的な仏教が発展する基礎を築きました。

その後、真言宗は空海が入定されると、京都にある東寺と高野山の金剛峰寺が中心になって、発展することになりました。空海は修行をする場として金剛峰寺、学問をする場として東寺というように、大きく二つに分けたかたちで考えていたようです。

ところが、だんだん時代が経つてくると、東寺は東寺で長者を中心とする組

高野山全景（和歌山県）
（写真提供：高野山金剛峰寺）



織しきをもっているお寺になり、また、高野山は高野山で座主ざすといういちばん偉い人を中心とした組織を有するようになりました。やがて、東寺の長者が高野山の座主を兼ねることになりました。このような中で覚鑿上人が登場するわけです。

覚鑿上人は、一〇九五年、肥前国藤津郡ひぜん くにふじつ（今の佐賀県鹿島市）で生まれました。空海が亡くなって二百六十年経っていました。当時、この鹿島地方一帯は京都仁和寺の莊園しょうえんであり、都からお坊さんなどが来ることも多かったと思われます。お父さんは伊佐平次兼元いさへいじかねもとといい、莊園の管理のような仕事をしていました。

十歳の時、お父さんを亡くした上人は、京都の仁和寺からやってきたお坊さんに連れられて、京都にのぼりました。幼いころから賢かしこかった上人は、京都だけでなく奈良でも勉強をしました。奈良には古くからの仏教が伝わっており、その教えを学ぶことは、立派なお坊さんをめざす上人にとっては大事なことでした。普通ふつ通つうだったらまだ、いろはを習っている時に、すでに仏教学の勉強をやっていたわけです。二十歳になると、

国家が正式に認めるお坊さんとしての儀式ぎしきを東大寺とうだいじですませました。

そしてこの年、空海ゆかりの地である高野山へ行き、以後約八年間、高野山・京都・奈良で、厳しい勉強と修行に明け暮れます。

上人は、真言宗のいろいろな流派りゅうはの教えや、修行のやり方を統一しようとした人であり、また、修行の大切さを説いた空海の教えを忠実に実践し、復活させることを自分の使命だと考えた人だといわれています。上人が高野山にのぼるしばらく前は、そこにはわずかのお坊さ



覚鑿上人像（興教大師850年御遠忌）
（真言宗智山派総本山 智積院蔵）



根来寺・根本大塔（和歌山県岩出町）
（写真提供：根来寺）

んしか住んでいなかったそうです。また、宗教界全体の秩序が乱れ、対立や争いも絶えない時代でした。そういう時に、高野山へのぼり、一生懸命その復興に力を注いだのです。たとえば、真言宗の大事な儀式を復活させたり、大伝法院というお寺を建て、これを真言宗を学ぶ中心地にしようと考えたりしました。

一一三四年、上人は東寺の長老と、高野山の座主とを兼ねる最高の位につくことになり、真言宗の統一という上人の願いは大きく前進しました。ところが、上人の良い評判がたつにつれて、そ

れをねたむ人々も出てきたようです。上人はよそから高野山にきた人であり、高野山の座主には東寺の長老がなるしきたりもあつて、上人をしりぞけようとする運動がしだいに激しくなりました。そこで上人は、座主の地位を自ら辞め、高野山の密厳院という所に引つ込んでしまい、千五百日の無言の行をやったのです。有名な「密厳院発露懺悔文」も、このころ書かれたといわれています。そこには、上人自らの罪をことごとく懺悔し、同じようにこの世の全ての人たちになり代わって、世の中の人たちが体と口と心の三つでつくったたくさんの罪を、今、仏様の前に全部懺悔申し上げますと述べています。覚鑿上人は、非常に自分を責める気持ちが高く、「全部自分が悪い」と言つて、人のせいになかったのです。そういうところがりっぱです。ね。

「弘法大師の精神にかえる」という上人の願いと行動は、すべての人には理解されず、受け入れてはもら

えませんでした。一一四一年、ついに和歌山県岩出いわでの根来ねざるへ大勢の弟子といっしょに移りました。根来は、かつて地元の有力者から土地の寄付を受けて寺を建てていたところですが、根来で上人はまた新しく活動を始めました。しかし、一一四三年、根来円明寺えんみょうじで亡なくなりました。四十九歳でした。もう少し長く生きていたら、自分の考えを広められたのではないかと思われます。

上人の死後、その思想と教えは人々によつて受け継つがれて発展し、真言宗の一つの宗派として多くの信者を増やしていきました。その功こう勞ろうが認められ、江戸時代の一六九〇年、東山ひがしやま天皇から興教大師こうきょうだいしという

称しょうごう号ごうを送おくられました。大師だいしという称号しょうごうを

送おくられた尊とうじいお坊ぼうさんは、歴史上二十四人

ほどしかいませんが、そのうちの一人がこの覚鏝上人興教大師かくがいしんこうきょうだいしなのです。

現在、鹿島市の誕生院には、覚鏝上人かくがいしんに関する遺跡いせきとして胞衣塚えなづかと産湯井うぶゆのいが残かっています。胞衣塚えなづかには、覚鏝上人かくがいしんの臍へその緒おが埋うめられているといわれ、この付近に小便をすれば、大病にかかるとの伝説が残かっています。また、産湯井うぶゆのいは、覚鏝上人かくがいしんの誕生の際に産湯に使用された井戸で、境内けいだいの中央にあります。今でも、四季を通じて水が絶えることはないそうです。



胞衣塚（誕生院）

覚鏝上人の御廟所（写真提供：根来寺）

